
 学 会 記 事

第 198 回新潟循環器談話会

日 時 平成 6 年 2 月 19 日 (土)
午後 3 時より
会 場 新潟大学医学部
第五講義室

I. 一 般 演 題

1) 無治療で経過した単心房例

北沢 仁・津田 隆志(木戸病院内科)

無治療で経過していた単心房例を経験したので文献的考察を加えて報告する。症例は44才女性で主訴は労作時呼吸困難。17才時A病院にて開心術が施行されたが中止。

2 回流産ののち、33才時に男児出産 (1,700 g)。34才時にB病院にて心臓カテーテル検査が施行され、単心房と診断された。この時、肺動脈圧 34/12 mmHg, 右室収縮期圧 70 mmHg, 肺体血流比 3.04, また僧帽弁逆流と三尖弁逆流は軽度で、再手術を勧められたが本人拒否。以後、無治療にて NYHA II で経過したが、41才から NYHA III となる。この頃 I 度房室ブロック (PQ. 320 ms) を指摘される。44才時には心房細動を契機に起坐呼吸となり当科へ入院。入院時には高度僧帽弁閉鎖不全と、三尖弁閉鎖不全が認められた。

本例は肺動脈狭窄を合併した結果、早期に Eisenmenger 化しなかったと考えられた。一方、入院中みられた心房細動、房室伝導障害及び房室弁逆流は、内科治療に奏効し難く、根治手術の可否について検討を要した症例として呈示する。

2) 僧帽弁置換術後極度の駆出率低下を来し beta blocker による治療が奏効した 1 例

青木英一郎・上野 光男
金沢 宏・山崎 芳彦 (新潟市民病院)
桜井 淑史 (第二外科)

症 例：小○ム○ 53才 主婦

主 訴：易疲労性 咳嗽 心悸亢進

家族歴：特記すべき事なし

既往歴：明確なリウマチ熱の既往は認めない

現病歴：昭和42年初産時に心雑音を指摘されている。

昭和60年8月下旬、呼吸困難、心悸亢進あり、9月25日

カテーテル検査を施行して MR+TR の診断を得た。EDV: 195 ml, ESV: 55 ml, EF: 71% で MVR の poor risk group にははらぬと判断して MVR を施行した。切除した乳頭筋の組織所見では結節性の繊維化と古い Ashoff Body を示唆する像を認めている。昭和60年12月13日の UCG では、EDV: 110 ml, ESV: 43 ml, EF: 61% で myocardial mass の regression も得られたと判断していたが平成3年6月に施行した UCG では EDV: 264 ml, ESV: 216 ml, EF: 18% と極度の左室の拡大と収縮能の低下が示された。平成5年4月入院し、強心剤、利尿剤、ACE inhibitor, denopamine による治療を開始したが short-run が頻発し咳嗽激しく mexitil 300 mg/day tid を投与したがなかなか制御出来なかった。肺うっ血の所見がないので家族の同意も得て、captopril, mexitil, denopamine などは総て中止し acebutolol 100 mg/day より漸増して 300 mg/day tid 投与を続けた。RI-Angiography による EF の評価では、H5. 6. 28. の投与前の EF: 14.7%, 投与開始して3ヶ月を経過した H5. 10. 5. では EF: 24.03% と増加したが、H5. 12. 1. には EF: 20% と頭打ちとなった。降圧点に達してしまったのか、beta-blocker を更に増量しうるか判断の資料になるかと尿中及び血中カテコラミン三分画、h-ANP, PRA, AVP などを測定して検討した。

Acebutolol 投与により塩分水の貯溜傾向は明らかで GIK+furosemide の投与を必要とし、Chest-XP 上肺うっ血はないが咳嗽は持続し、osteoporosis は認められないが下肢筋肉痛を訴えた。しかし発汗は著明に減少し肝臓の腫脹も軽減した。

3) 心外膜嚢胞の 1 例

大島 満・富樫 清朋 (村上総合病院内科)
樋口 健史 (新潟大学放射線科)

症例は32歳の女性で、自覚症状はなく、健診でも特に異常を指摘されたことはなかった。'93年の健診で、胸部レ線上下右横隔膜角に卵円形の異常陰影を指摘され、'93年8月当科外来を受診した。胸部 CT および MRI の所見から、心外膜嚢胞が考えられた。心エコーでも cyst を思わせる限局性の echo-free space を認めた。

心外膜嚢胞は10万人に1人の頻度で、中年期に発見される。無自覚のことが多いが胸痛や cyst による圧迫に起因すると思われる症状を来すこともある。良性の腫瘍で発生学的な起源を持つと考えられている。予後は良好で、自然消失をみたとの報告もある一方、cyst の増大